

皆様おはようございます。

梅雨も終わりころとは思いますが、先週末は警報級の激しい降雨がありました。新幹線も、広島博多間が何時間も止まったようですね。梅雨も残りわずか、大きな災害が起こり、人命が失われることのないまま梅雨が全国で開けますようにと祈るばかりです。

さて今日は7月最初の礼拝ですが、今年も半分が終わりました。今年の前半の主の恵み深いお導きと同様、私たちにとっては先行きの分からない私たちの前途であろうとも、主は恵みと憐れみとに満ちたお導きを与えて下さるとの確信をもって年の後半の歩みを進めていきたいと願います。

さて、ヘブル書では、御使いに勝る方イエス様、モーセに勝る方イエス様と語り続けてきましたが、今度は前章後半からイエス様を執り成しの大祭司にたとえて話が進められてまいりました。

4:14 さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。

4:15 この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。

4:16 だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。

それに引き続いて、5章では大祭司イエス様について語られ、そして後半には旧約聖書にごくわずか登場するのみの、謎に満ちた祭司メルキゼデクになぞらえてイエス様を語ります。

1 大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。

神の前に立って人のための執り成しをする大祭司と言えども人間であり、その務めは「罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役」であることが記されてあります。

人は罪と汚れあるままではきよい神様の前に出ることがかなわず、まずその罪の贖いをするために供え物といけにえがささげられなければならない、その供え物を民に代わって神様の前に差し出し神様に仕えるのが大祭司の務めでした。

2 彼は自分自身、弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を、思いやることがで

きると共に、

3 その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものを行わなければならないのである。

しかしだからと言って、彼が聖く、罪がないから神様の前に出ることが出来るわけではありません。

大祭司自身もまた弱さがあり、民同様自分自身の中にも罪を持っており、自分自身のためにもその罪について捧げものを行わなければならないが、そのように自らの弱さと罪とを持つものとして、「無知な迷っている人々を、思いやることができる」と聖書は語ります。

前章にもこのように書いてありました。

4:15 この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。

完全無欠な神様や、大祭司であれば、私たちの弱さなど理解できるはずがないという思いが、人の心の中にはたくさんあるのでしょう。聖書には繰り返し「弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を、思いやることができる」とか、「弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」と書いてあるのです。

そうです、人間はどこまで言っても、旧約の神の民も新約の弟子たちも教会の信徒である私たちも、弱さと無知の中、迷っているのです。ですから神様も、大祭司も、そういう弱くて無知で、さ迷い歩く私たちを助けることが出来るお方でなければなりません。

そしてこの弱さを理解して、思いやるということは、自分自身が弱さを痛いほど自覚していたり、苦労を身に受けていたりすることによって出来やすくなるものであるということ、私たちは経験によって知っています。

挫折と失敗の経験、病の経験、喪失の経験、裏切られたり、見捨てられたり、物事がことごとくうまく行かなかった経験など、そういう熾烈な経験が、私たちにもたらすものがあると教えられる思いがいたします。そうであるならば、私たちは常に苦しみには会いたくないと願い、主にそうお祈りをして願うものですが、弱さを身に受けているので、思いやる事が出来る、そういう風になれるようにと神様が送って下さる試練なのかもしれません。

1 ペテロ 1:5 あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである。

1:6 そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。

1:7 こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るであろう。

1:8 あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいけなけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。

1:9 それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである。

私たちはここにありました金塊などでもあろうものなら、人生はもう勝利したも同然、お金がたくさんあればあとは何の心配も要らないなど考えるのだと思います。なかなかそういう境地に達する方はそう居ないとは思いますが、しかし聖書は金も所詮は朽ちていくほかない尊くもない者と書かれています。むしろ精励された金よりもはるかに大切なのは私たちの試された、精錬されて輝きを本当に増し加えられた信仰であると聖書は語るのです。

5:4 かつ、だれもこの榮譽ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。

5:5 同様に、キリストもまた、大祭司の榮譽を自分で得たのではなく、／「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」／と言われたかたから、お受けになったのである。

5:6 また、ほかの箇所でもこう言われている、／「あなたこそは、永遠に、／メルキゼデクに等しい祭司である」。

この、メルキゼデクとは、本当に不思議な祭司です。旧約聖書には、創世記14章と詩編110編にしか登場しません。彼はイスラエルの祭司ではなくて、当時はイスラエルが入っていく前のカナンのサレム(後のエルサレム)の王でした。しかしその王は創世記では「いと高き神の祭司」と紹介され、彼からの祝福に、アブラハムはイスラエルの祭司に対してするのと同じように戦利品の十分の一を捧げたとあります。

メルキゼデク(その意味は義の王)については、出生の記録も、系図も聖書は記していません。このミステリアスな王であり祭司であるメルキゼデク、民族の父アブラハムがこの祭司を通して神様に捧げものをささげたところの、イスラエル民族が敬意をもって仰ぎ見るメルキゼデクを登場させて、ヘブル書ではイエス様を紹介しています。

創世記 14:1 シナルの王アマラペル、エラサル王アリオク、エラム王ケダラオメルおよびゴイムの王テダルの世に、

14:2 これらの王はソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アデマの王シナブ、ゼボイムの王セメベル、およびベラすなわちゾアルの王と戦った。

14:3 これら五人の王はみな同盟してシデムの谷、すなわち塩の海に向かって行った。

14:4 すなわち彼らは十二年の間ケダラオメルに仕えたが、十三年目にそむいたので、

14:5 十四年目にケダラオメルは彼と連合した王たちと共にきて、アシタロテ・カルナイムでレパイムびとを、ハムでズジびとを、シャベ・キリアタイムでエミびとを撃ち、

14:6 セイルの山地でホリびとを撃って、荒野のほとりにあるエル・パランに及んだ。

14:7 彼らは引き返してエン・ミシパテすなわちカデシへ行って、アマレクびとの国をことごとく撃ち、またハザゾン・タマルに住むアモリびとをも撃った。

14:8 そこでソドムの王、ゴモラの王、アデマの王、ゼボイムの王およびベラすなわちゾアルの王は出てシデムの谷で彼らに向かい、戦いの陣をしいた。

14:9 すなわちエラム王ケダラオメル、ゴイム王テダル、シナル王アマラペル、エラサル王アリオクの四人の王に対する五人の王であった。

14:10 シデムの谷にはアスファルトの穴が多かったので、ソドムの王とゴモラの王は逃げてそこに落ちたが、残りの者は山にのがれた。

14:11 そこで彼らはソドムとゴモラの財産と食料とをことごとく奪って去り、

14:12 またソドムに住んでいたアブラムの弟の子ロトとその財産を奪って去った。

14:13 時に、ひとりの方がのがれてきて、ヘブルびとアブラムに告げた。この時アブラムはエシコルの兄弟、またアネルの兄弟であるアモリびとマムレのテレビンの木のかたわらに住んでいた。彼らはアブラムと同盟していた。

14:14 アブラムは身内の者が捕虜になったのを聞き、訓練した家の子三百十八人を引き連れてダンまで追って行き、

14:15 そのしもべたちを分けて、夜かれらを攻め、これを撃ってダマスコの北、ホバまで彼らを追った。

14:16 そして彼はすべての財産を取り返し、また身内の者ロトとその財産および女たちと民とを取り返した。

14:17 アブラムがケダラオメルとその連合の王たちを撃ち破って帰った時、ソドムの王はシャベの谷、すなわち王の谷に出て彼を迎えた。

14:18 その時、サレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒とを持ってきた。彼はいと高き神の祭司である。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った、／「願わくは天地の主なるいと高き神が、／アブラムを祝福されるように。

14:20 願わくはあなたの敵をあなたの手に渡された／いと高き神があがめられるように」。

アブラムは彼にすべての物の十分の一を贈った。

14:21 時にソドムの王はアブラムに言った、「わたしには人をください。財産はあなたが取りなさい」。

14:22 アブラムはソドムの王に言った、「天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。

14:23 わたしは糸一本でも、くつひも一本でも、あなたのものは何にも受けません。アブラムを富ませたのはわたしだと、あなたが言わないように。

14:24 ただし若者たちがすでに食べた物は別です。そしてわたしと共に行った人々アネルとエシコルとマムレとにはその分を取らせなさい」。

5:7 キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれたのである。

5:8 彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、

5:9 そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり、

5:10 神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである。

このように不思議な、ミステリアスな、正体不明のメルキゼデクでも、神様はご自由に、いつの時代、どこの場所にあっても、神の民がエルサレムに入る前に、先のことを見越したように「いと高き神の祭司」を立てておられるのです。そうであれば、ミステリアスで、「いと高き神の祭司」で、強力に民の祝福のために働く働き手が登場し、父祖アブラハムがその方の神様から遣わされたのを知って身を低くして捧げものを託したように、イエス様について信じませんか、ヘブル書はユダヤの人たちに迫ります。

とはいえ、メルキゼデクもいかにミステリアスな存在であったとしても、先にありましたように人間に過ぎないのですが、キリスト・イエスは「その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ」たのです。「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源」となられました。この方のもとに行くならば、救いの源であって、次から次から救いがこの方によってもたらされるのです。

このお方が、ご苦勞をなさって、捨て石になられ、踏み台となって、貧乏くじを引いて、「激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そし

て、その深い信仰のゆえに聞きいれられた」のです。「神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられ」たのです。

しかしこれは頑迷なユダヤ人のために分かりやすく説明されたものです。実際はいかにミステリアスであろうとも、その出自が謎であろうとも、彼は人に過ぎなかったのですから、イエス様とは比較にならないということは明らかです。しかしユダヤ人たちにわかるように、このような語り方で語られているのです。

5:11 このことについては、言いたいことがたくさんあるが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、それを説き明かすことはむずかしい。

5:12 あなたがたは、久しい以前からすでに教師となっているはずなのに、もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている。

赤ちゃんには歯がなく、消化能力も弱く、ミルクのようなものしか飲むことが出来ません。しかしやがて後、なおなお成長していくにはしっかりと生えた歯で、野菜や肉や魚や、諸々の食べ物を嚙んで飲み込んで、消化して大きくなっていきます。大きな大人が、赤ちゃんのようにミルクだけ飲んで生活するという事は、栄養学においてはどうかは分かりませんが、見た目には滑稽であるように、「久しい以前からすでに教師となっているはずなのに」、「もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末」だと語られます。これはいつまでたってもイエス様を迎え入れることのできない頑迷さが語られているのだと思います。

5:13 すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の言葉を味わうことができない。

5:14 しかし、堅い食物は、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練された成人の取るべきものである。

義の言葉。義とは、神様との正しい関係の事を指します。何を神様は私に望んでおられるのか、神様に照らして何が正しいのか、神様を除いて正しいということはありません、神様と、その遣わされた方を無視しては、義も正しさも御心も理解できないわけです。そういう初心者の状態から離れ、それが善悪を見分けるといふことであり、その中で実際の日々の価値判断と決断、実行の訓練を経過した成人が固い食事をとることが出来、そうでなければ赤ちゃん並みだと聖書は語ります。

今日もイエス様の事が語られました。このイエス様が私たちの今週の生活の中であってど

ういう心の位置におられるのか、どう訪ね、どう求め、どう決断し、実行するのが私たちに問われているのです。私たちは成熟した信仰者なのでしょうか。それともお乳を飲むばかりの赤子なのでしょうか。主イエス様に向かって生き生きと立ち上がり、疾走する人生でしょうか。それともあやしてもらってすやすやと眠り続ける信仰人生でしょうか。イエス様をどう知り、イエス様の言葉にどう感動し、イエス様に応答するかがそれを分ける鍵のように思います。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。私たちは苦しみに遭いたくないと考えますが、試練によってこそ、「信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らか」（1ペテロ 1:6）になることをありがとうございます。いつもイエス様に信頼し、御言葉を愛し、従順に従う私たちのため、イエス様はいつも救いの源でいて下さり、私たちの人生を救いで満たしてくださいますからありがとうございます。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン